実践報告

周手術期看護学実習におけるシャドーイングの必要性

長田艶子
奈良県立医科大学医学部看護学科

Necessity of Shadowing for Perioperative Nursing Practice

Tsuyako Nagata
Faculty of Nursing, School of Medicine, Nara Medical University

Ⅰ．看護学教育におけるシャドーイングとは

看護学における基礎教育や卒後教育として、シャドーイングという方法がある。まずシャドーイングとは何か考えてみたい。一般に、ネイティブの発音を聞きながら、その単語や文をすぐ後から影のように追いかけて発音していく、英語の学習法の一つとして知られている用語である。しかし、これが看護学教育で実施されているシャドーイングでないことは明らかである。看護大辞典および看護・医学事典、広辞苑や大辞泉などでシャドーイング（Shadowing、シャドウイング）を探してみたが、掲載されていない。

では、看護学教育におけるシャドーイングとは何なのであろうか。大坪ら（2010）は、「シャドウイングという方法は、文字どおりロールモデルの後ろを影のように離れず付いてまわる実習方法です。もともとは『ジョブシャドウイング』といわれ、米国で行われている子ども向けのキャリア教育の一種で、生徒が企業の職場で従業員に『影』のように密着し、その仕事内容や職場の様子を観察する方法です。」としている。中村ら（2011）は、大学の看護学教育で「・・・・・リーダー看護師のシャドウイング（影のようについて歩き、その役割について理解を深める）を入れるなども考えられており・・・・・」とし、以前から実施されていたと述べている。また大坪ら(2010)は、認定看護管理者教育課程サードレベルの研修で、シャドウイングを行った経験について「シャドウイングは、ロールモデルの実践を実際に見て、体感することで、講義で学んだ理論をいかに実践すべきか具体化することができる有効な学習方法であると考えます。」と報告している。このように、看護学の基礎教育や認定看護管理者教育において導入されていることがわかる。

「看護学教育の在り方に関する検討会報告」（平成14年3月26日）によると、「臨地実習の場に卓越した看護職者のロールモデルがいることが学生に良い影響を与える。中でも身体侵襲を伴う技術の実施は実践現場の経験を積んだ看護職者の責任であり、学生にケアの実践モデル、専門職者としての役割モデルとして機能してこそ臨地実習の意義がある。優れた看護が実践されている状況や卓越した看護職者の存在そのものが最良の教育となる。」としている。シャドーイングを効果的に行うには、ロールモデルが重要な鍵を握っているといえる。

以上のことから、看護学教育におけるシャドーイングとは、ロールモデルとして機能する看護師に同行し、看護の実践を経験することで、学内で学んだ知識を深めることができる実習方法であるといえるのではないだろうか。

Ⅱ．シャドーイングについての研究

看護学教育におけるシャドーイングの研究は、これまで行われているのであろうか。国内の研究について、医学中央雑誌Web版ver.5を使用し、「シャドウイング」and「看護」２つのキーワードで検索した結果は４件であった。「シャドーイング」and「看護」２つのキ

ーワードでは、１件であった。合計５件であったが、看護学教育に直接関連するものは１件のみであった。その１件は、佐居ら（2008）によるもので、学部２年生を対象に初めての実習を円滑にすることをめざし、シャドーイングアドバンス導入を試みたというものであった。その結果、「学生は『様々な看護場面を体験』することで『講義と実践のつながりを実感』し、さらに、『自らの成長を自覚』し、『モチベーションが向上』しており、シャドーイングアドバンスは、『実習に役立つ演習』であることがわかった」としていた。

次に国外の研究について、MEDLINE および CINAHL を使用し、「shadowing」and「nursing」２つのキーワードで検索すると 55 件（重複を除く）であった。年代別にみると 2008 年～2011 年は５件ずつ、2006 年が最多の 10 件、2005 年以前は、４件以下であり、一番古いものは 1992 年であった。次に、看護学の基礎教育に関する研究について、「shadowing」and「nursing」and「undergraduate」３つのキーワードで検索したところ６件であった。年代別にみると、2011 年、2009 年、2007 年、2006 年、2004 年、2002 年が１件ずつであった。

以上のように、国内外において看護学教育に関連するシャドーイングの研究は非常に少なく、周手術期看護学実習におけるシャドーイングの研究は見当たらなかった。

Ⅲ．本学における周手術期看護学実習

本学における周手術期看護学実習の位置づけを説明する。履修時期は、３年後期であり、３単位 135 時間である。３年前期までに基礎看護学の講義・実習科目の全て、成人・老年・小児・母性・精神の看護学援助論を履修済みである。実習目的は、周手術期にある患者およびその家族を、身体的・心理的・社会的に統合して理解し、各期に応じた看護を実践するための能力を養うことである。実習目標の中には、手術直後や術後経過（傷害期、転換期、回復期）に応じた看護計画の立案ができること、患者の状況に合わせた看護実践が適切に行えることが含まれている。

実習目標を達成するためには、十分な事前学習による知識の充実と、実際場面を想定した具体的な計画の立案が必要である。そこで事前学習による知識の充実として、９月以降に開始する実習に対して夏期休業前の７月に、履修予定の学生全員に実習オリエンテーションを実施している。ここでは、学生に実習病棟を知らせ、実習病棟ごとに、受け持つ可能性の高い疾患・術式の紹介と、実習までに修得しておくべき知識・技術内容を事前学習課題・事前演習課題として提示している。この時点で学生は、３年前期までの看護学援助論を履修済みであるため、実習の事前課題は、ほとんどが既習科目の復習内容となっている。技術の修得には、夏期休業の期間に実習室を開放し、学生の使用予定日時に合わせて担当教員を配置し、質問や技術の確認が行える体制を整えている。

以上のような準備を行い実習に臨んでも、術後の患者の看護を実践する場合、学生は患者の変化にとまどい、計画は出来ていても実践できずに終わってしまう場合がある。特に手術直後は、経時的に状態を把握する必要があり、看護師も協力しあって観察や環境設定を行っているため、その場の雰囲気に圧倒されたり、１つの看護実践に時間がかかり他の観察が出来ないままに終わってしまうなど、機会を失ってしまうこともある。また学生は、受け持ち患者の手術見学をしており、術後１日目の状態を予測して計画を立ててくるが、夜間の状態から計画の修正が必要な場合もある。そうなると学生は、即座に計画を修正することは難しく、看護師が主体となって実施を行い、学生は見学および一部実施にとどまってしまうこともある。

以上のことに対応するには、受け持ち患者の状態を何パターンか予測しておくことも必要となる。そのパターンとは、標準的な術後経過をたどっている場合、標準的な経過より回復が速い場合、標準的な経過より回復が遅

れている場合、術後合併症の症状が出現している場合などである。実施の手順や方法をパターン毎に考えておき、それぞれのパターンで何度もイメージトレーニングしておくことが必要となる。しかし、ここまで準備出来る学生は、かなりのものである。このように事前の準備を万全に整えても、実際場面を見学したことも無い学生にとっては、実践することが困難な状況となることもある。ここで、受け持ち患者が手術を受ける前に、他の患者の術後看護をシャドーイングするという方法も有効ではないだろうか。

Ⅳ. 周手術期看護学実習におけるシャドーイングの実際

平成22年4月に本学に就任し、初めてシャドーイングという実習を経験した。私が平成22年度に担当した病棟では、平成21年度の担当教員が、周手術期の看護展開を効果的に行う目的で、周手術期看護学実習にシャドーイングを導入したということであった。基礎看護学実習では以前から実施されており、病棟側や学生に混乱は生じなかったようである。この時担当した教員は、平成21年度末で退職しており、実際のシャドーイングについての効果は確認出来ていない。病棟指導者によると、シャドーイングを実施することで、学生は術後看護を見学ではなく、一部実践が可能になり、効果はあったとのことであった。また、シャドーイングは、周手術期看護学実習には必要であり、今後も続けた方が良いと病棟指導者の意見は一致していた。そこで、実習前に病棟指導者と調整を行い、平成22年度は、必ず全学生が実施するのではなく、受け持ち患者が入院するまでに実習期間がある学生に、可能な限りシャドーイングを実施することとなった。

ここでのシャドーイングは、看護師の看護を見学したり、看護師と共に患者の観察や一部援助を実施したりすることを意味する。佐居ら（2008）は、「学生が看護師とともに行動し、看護師の活動の実際を見学し、状況に応じて看護師と共に患者に看護援助を行う形態」と位置づけていた。シャドーイングという言葉から、看護師の看護を見学するのみと考えがちであるが、影のように密着し観察するだけではなく、一部援助することもシャドーイングに含めて良いと考える。

平成22年度は、5グループ39名が実習したが、シャドーイングを行った学生は15名であった。シャドーイングは術後1日目の患者を基本とし、状態観察、清拭、離床への援助などを看護師と共に行った。表1に示す通り、1グループの学生数は、7～9名であり、シャドーイングを実施した学生がいなかった4グループを除くと各グループで3～4名が実施していた。1週目の実習経過のイメージを表2に示す。実習初日は、午前中に手術室とICUのオリエンテーションがあり、午後から病棟オリエンテーションを全員で受ける。その後、学生A,B,C,Dの4名は、既に入院中または実習初日に入院された患者を受け持つ。4名とも水曜日に手術予定の患者であり、受け持ち後は、情報収集と手術説明やオリエンテーションがあれば可能な限り同席し、看護過程の展開をしていく。学生E,Fの2名は、火曜日に入院した患者を受け持つ。入院は、通常午後からのため、午前中は、月曜日に手術を受けた患者のシャドーイングを実施する。学生G,Hの2名は、木曜日に入院した患者を受け持つ。火曜日の午前中は、学生E,F同様、月曜日に手術を受けた患者のシャドーイングを実施し、午後からは、午前中の振り返りを行う。この表では、8名中4名（E,F,G,H）が2名ずつに分かれ、X氏とY氏のシャドーイングを実施したことになる。

術後1日目の患者に対する看護として、状態に合わせたバイタルサインの測定、ガーゼ交換の介助、全身清拭、陰部洗浄、寝衣交換、離床への援助、尿量やドレーン排液の観察および一日量の測定などを実施している。シャドーイングでは、ロールモデルの看護師が学生に看護の実際を見学させ、一部看護の実践

表１　平成22年度の実習学生数とシャドーイングを実施した学生数

	1G	2G	3G	4G	5G	合計
学生数	9	7	7	8	8	39
シャドーイングを実施した学生数	4	4	3	0	4	15

表２　実習１週目の学生別実習経過のイメージ

<table>
<tr><th>学生</th><th colspan="2">（月）</th><th colspan="2">（火）</th><th>（水）</th><th>（木）</th><th>（金）</th></tr>
<tr><td>A</td><td rowspan="4">オリエンテーション</td><td rowspan="4">受け持ち</td><td colspan="2">手術前日</td><td>手術見学</td><td>術後１日目</td><td>術後２日目</td></tr>
<tr><td>B</td><td colspan="2">手術前日</td><td>手術見学</td><td>術後１日目</td><td>術後２日目</td></tr>
<tr><td>C</td><td colspan="2">手術前日</td><td>手術見学</td><td>術後１日目</td><td>術後２日目</td></tr>
<tr><td>D</td><td colspan="2">手術前日</td><td>手術見学</td><td>術後１日目</td><td>術後２日目</td></tr>
<tr><td>E</td><td rowspan="2">午前
X氏
シャドーイング</td><td rowspan="2">午後
受け持ち</td><td>学内</td><td>手術見学</td><td>術後１日目</td></tr>
<tr><td>F</td><td>学内</td><td>手術見学</td><td>術後１日目</td></tr>
<tr><td>G</td><td rowspan="2">午前
Y氏
シャドーイング</td><td rowspan="2">午後
午前の
振り返り</td><td>学内</td><td rowspan="2">受け持ち</td><td>術前</td></tr>
<tr><td>H</td><td>学内</td><td>術前</td></tr>
</table>

水曜日は、学内実習日であるが、受け持ち患者が手術日の場合は、病院実習としている。

もできるよう指導が行われている。シャドーイングを通して学生は、状態観察および援助の方法にとどまらず、患者の自覚症状も合わせ、看護師はその場でアセスメントし対応していることを学んでいた。学生は、術後１日目の看護を事前に学習しているが、実際に経験することで、患者の状態変化や看護に対する驚きや感動があることもまれではない。これらの学びは、カンファレンスなどを有効に活用し、学生間で出来る限り共有するようにしている。その効果であるかは、明らかではないが、シャドーイングの有無により、受け持ち患者での術後１日目の実習内容や全体の実習評価に違いはみられなかったと考えられた。

Ⅴ．今後の周手術期看護学実習におけるシャドーイングの是非

学生はシャドーイングを通して様々な学びを得て、その経験が受け持ち患者の看護に活かされていると考えられる。受け持ち患者に実施する前に、シャドーイングを希望している学生も多いと考えられる。それでは、シャドーイングをすべての学生に取り入れたらよいのではないだろうか。ここで、シャドーイングを実施する利点、欠点を考えてみたい。

シャドーイングの利点としては、術後１日目の患者に必要な観察、援助の実際を見学や一部実践を通して学べることにある。学生は、実施すべき内容は理解できていても、実際にどのような順序で情報を得ていくのか、どのようにアセスメントしていくのか、実際場面での対応は難しい。そこで、看護師の言動が大切な学びにつながっている。看護師は、患者に話しかけながら、痛みの程度や睡眠の状況などの情報を得ている。また、創部の確認と共に呼吸音や腹部の聴診なども実施している。バイタルサインの測定では、得られた値から正常か異常かの判断をするとともに、他の情報と関連さえ、援助の必要性、援助の適切な方法を考え実施している。ガーゼ交換で

は、直接介助と間接介助の看護師が、それぞれの役割を果たしている。全身清拭や離床への援助では、実施前の観察や患者の発言などから、どの方法が適切であるかその場で判断して実施し、実施中の言葉がけや観察などから患者に適切な看護であるかの評価も行っている。学生は、看護師の一つ一つの言動に意味があることを理解し、得られた情報から即座にアセスメントし、次への看護につなげていることも学ぶことができる。また学生は、慣れない環境、術後の傷害期にある患者という緊張に加え、患者の観察、援助の多さなどから、思うように行動できないことも想定される。これらのことから、周手術期看護学実習で、術後の傷害期にある患者の看護をシャドーイングすることは、意義があり、受け持ち患者で実際に学生が看護展開をしていくのに役立っていると考えられる。

次に、欠点について考えてみたい。シャドーイングを実施する患者は、受け持ち患者とは異なる。例えば、清潔や離床の援助の場合、シャドーイングで実施される清拭の方法は、臥位のまま全介助で実施する場合もあれば、座位が可能で一部患者が実施する場合もある。清拭と陰部洗浄、寝衣交換をどのような手順で実施するかは、その時の状況によって変化する。また、離床の援助を兼ねた清拭を考えて実施する場合もあれば、まず清拭をした後に、離床の援助を実施する場合もある。しかし学生は、シャドーイングした内容、実施方法をすべて真似てしまう傾向にある。その時の患者に適した看護であるかを判断していくことが大切であるが、シャドーイングで学んだとおりに出来ることを目標にしてしまう危険性もある。また、シャドーイングを全ての学生に実施しようとすれば、受け持ち期間が短縮され、手術後の回復期や退院に向けての看護が実践できなくなる可能性もある。

以上、シャドーイングについて考えてみたが、これまでほとんど研究は行われておらず、実際の効果は定かではない。今後は、シャドーイングに対する意見やシャドーイングでの学びについて調査し、効果を明らかにしていきたいと考えている。シャドーイングの鍵となるロールモデルについても調査が必要かもしれない。シャドーイングの効果が明らかになれば、全学生に取り入れていく方が良いと考える。以前に比べて周手術期患者の入院期間は、短縮してきており、現在でも３週間の実習期間中に、患者の退院により２事例を受け持つ学生もいる。シャドーイングを実施した後でも、受け持ち患者の周手術期看護の展開は可能と考えられる。いずれにしても、病棟との十分な調整が欠かせない。今後も十分に意見交換しながらより良い実習指導を目指していきたいと考える。

引用文献

文部科学省：大学における看護実践能力の育成の充実に向けて、看護学教育の在り方に関する検討会報告（平成 14 年 3 月 26 日）

中村惠子、渡邉由加利（2011）：看護版 OSCE のための模擬患者教育、看護教育、52（７）、528-534.

大坪明美、村上眞須美、上泉和子（2010）：管理者研修へシャドウイングを活用する、看護展望、36（２）、130-136.

佐居由美、大久保暢子、石本亜希子他（2008）：看護学導入プログラムにおけるシャドーイングアドバンスの試み、聖路加看護大学紀要、(34)、70-78.